

青森県の配石遺構－とくに環状列石について－

青森大学教授

村越 潔

はじめに

石は古く旧石器時代より、われわれ人類に不可欠な利器の主要材料として用いられ、また生活に必要な施設にも利用されている。たとえば前者の利器は、使用目的に適した形にそれぞれ加工されて、生業における重要な道具となり、後者は大小の自然石を、炉または墓地などのような施設の造営に用いている。石を人類が利用しはじめた背景には、フリント・黒曜石・珪質頁岩などに見られる、剥離面の鋭利な点が利器に最適と考えた結果であろうし、一方では石に秘められた永遠性に、神秘的な感情を抱いたためであるかも知れない。

過去に石を利用して造成され、発掘調査等によって現わされたような施設を広く配石遺構と呼び、その形態と造営された目的を把握または想定して、炉跡とか、集石遺構・組石石棺墓・環状列石と言う名をそれぞれに与えている。このような遺構は、一個の石によって成り立つものではなく、多数の石を人々が或る目的のために集め、配石し形成されたものなのである。

配石遺構には、石の配置によるさまざまな形態が見られ、それらは調査担当者により露出された平面の形態を基に、幾種類かの分類がなされている。たとえばその例として、1982年（昭和57）に県の埋蔵文化財調査センターが行った黒石市沖浦の一ノ渡遺跡は、十和田湖近くに源を発する浅瀬石川の河岸段丘上に所在し、付近に遺構の造成に必要であった河原石の供給源があり、その豊富な石材を利用して配石の施設が造られていた。

発見されたこの配石遺構は、調査担当者により、組石・列石・集石・立石に4分類され、さらに石や礫の配置・集合の形状によって、組石で7、列石・集石・立石は各2の数に細分類がなされており、遺跡の性格を把握するため、石ならびに礫を取り外して下部を調べた結果、土壌を有するものが多く、したがって当遺跡の配石遺構は、墓域であろうとする考えが強い。この配石遺構の造営時期は、縄文時代後期中葉の十腰内Ⅰ群（Ⅰ式と呼称されることも多い）土器期と考えられている¹⁾。

環状列石

配石遺構の一つに環状列石（ストーンサークル）と言われるものがある。この遺構は端的に言うと、多数の石を円形に配した石の集合遺構であり、なかには単に石を円形に並べた程度のものもあるが、多くは数個ないし数十個の石を1つの単位とする集石の配列によって構成され、立石を伴う例が多い。ただしわが国で発見される当該遺構には、イギリスのソールズベリー郊外にあるストーンヘンジ（P－261, 1・2）や、その北のエーベブリのような巨石を使ったものは見られず（P－261, 1・3）、遺跡近辺の河川に転在する河原石が主として利用されている。

わが国で発見されるこのような環状列石の分布を見ると、明確に捉えてはいないが、北は北海道から西は近畿地方にまで広がっており、分布密度は北海道と東北北部に多く、したがって北方文化の一環的な色彩も強い。なお石を多く利用し広い面積をもつ遺跡は、山梨・長野県などの中部山岳地帯に分布を見せている。

環状列石の初現は、長野県大町市の上原遺跡であろうか。その時期は関東地方の縄文時代前期末葉の、

諸磯 B 式土器期ではないかと思われる²⁾。

東北部では立石を伴う関連遺構として、国史跡の指定を受けている岩手県北上市の樺山遺跡が古く、縄文時代前期末から中期末に至る各種の遺構・遺物の発見を見ているが、配石そのものは環状を形成していない³⁾。整った環状列石を呈する事例としては、縄文時代後期中葉の十腰内 I 群土器期と思われる、秋田県鹿角市大湯に所在し、国の特別史跡となっている野中堂・万座の両遺跡が代表であり⁴⁾、全面の発掘が行われていないため規模は不明だが、大湯に類似する形状と、日時計状遺構を有するものとして、同県の鹿角郡小坂町杉沢で発見された、小坂環状列石を加えることが出来よう⁵⁾。東北部の環状列石は、後期の十腰内 I 群土器期に発展を遂げ、その後は急速に少なくなっていくようである。

環状列石の性格

このような環状列石が、いかなる目的をもって造営されたものなのか、その性格について大湯遺跡の調査の際にも、またそれ以後も絶えず付き纏っていた。大場磐雄は調査報告書『大湯環状列石』のなかで、「元来大湯遺跡における配石遺構は何を物語るか、(中略) 墓地か祭祀址か、将た別種の遺構か……その決定を見ることなく今日に至っているのである。」⁶⁾ と述べ、さらにこれら遺構の意義目的について、結論を得るには「まだ時期尚早の感が深い。」⁷⁾ とし、ほぼ同じころに調査が行われた前述の上原遺跡についても、墳墓説と信仰関係説の両見解をあげ、北海道の配石下部に副葬品を伴った土壌をもつ類似の遺跡については、駒井和愛の墳墓説とする考えを肯定している⁸⁾。

これに対し、大湯遺跡の調査で中心的な役割を担った齋藤忠は、1970 年(昭和 45) 9 月 5 日に十和田町(現鹿角市) で開かれた、北奥古代文化研究会第 3 回大会の記念講演において、「大湯の環状列石は縄文時代の墓地であると考えて居ります。」と明言し⁹⁾、さらに『月刊考古学ジャーナル』254 号において、「配石遺構、特に環状列石は明らかに墓であり墓地である」と冒頭に主張されている¹⁰⁾。この後段における墓地説の背景には、配石遺構の立石に接して、十腰内 I 群に属する甕棺型土器が、直立の状態で出土した 1985 年(昭和 60) 年度の知見と、土壌より採取した土壌の脂肪酸分析の結果、高等動物の脂肪酸ならびにコレステロールやステロールの検出も、有力な根拠となっているのではないかとと思われる¹¹⁾。

現在は類似遺跡の調査も進み、発見される遺構および遺物の状況から、墓地説に固まりつつあるようである。

青森県の環状列石

青森県には配石遺構をもつ遺跡は多いが、環状列石なるものは、下北郡東通村尻屋の札地遺跡、弘前市大森字勝山の勝山遺跡、三戸郡田子町関の在家平遺跡、三戸郡三戸町泉山字田ノ上の泉山遺跡、青森市野沢字小牧野の小牧野遺跡などであり、確認されてはいるが、発掘調査の手が加わっていないものに、南津軽郡平賀町の太師森遺跡がある¹²⁾。

1. 尻屋札地遺跡

この遺跡は、本州最東北端の尻屋崎と尻屋集落の中間に近く位置し、太平洋戦争後に進駐したアメリカ軍の小型機専用飛行場建設のため、大半が削られ破壊されている。1963 年(昭和 38) に行われた九学会連合下北総合調査の折、本州最北端の大間崎に近いドウマンチャ貝塚の調査終了後、慶応大学の江坂輝彌の案内で、吹切沢・ムシリ・物見台などの遺跡を訪れた際に、足を延ばして当遺跡も視察し、削平

された飛行場跡に立って空しい思いを抱いた記憶がある。同じ慶応大学に居られた清水潤三の報告によると、1954年（昭和29）7月27日から8月7日にかけて調査の結果、「特殊のストーンサークル様遺構は径50m余の不規則な半環状をなす石群と、その円周の内外に点在する一種の石群からなる。」と述べ、破壊を免れた東および南には、「枝状に分岐した突出部が認められた。この石群は随所に散在あるいは密に並ぶ径2m内外の不正円形を呈し、石塊二ないし三重に積上げた小規模なケールン状の部分と、それをつらねる巾2m内外の、一重の川原石敷の道路状の部分からなっている。」とし、ケールン状の石積みのなかには大型の立石をもつものもあるが、石積みの下部には土壌のような遺構は見られず、したがってこの環状列石を墳墓と認めることは不可能であり、宗教的な構築物との疑いもあって、遺跡の性格については結論を保留している¹³⁾。なお当環状列石の造成期に関して詳細は不明だが、『世界考古学大系』1の巻末に縄文土器の編年表があり、そのなかの奥羽北部における後期中葉の位置に、札地式なる形式名が掲載されている¹⁴⁾。恐らく十腰内Ⅰ群土器期に相当するのであろう。

2. 大森勝山遺跡（P－261, 4・5）

遺跡は岩木山の北東麓に位置し、海拔約145mに所在する。1960年（昭和35）8月から11月にかけて、岩木山麓埋蔵文化財緊急調査の一環として、前年度に発見された大竪穴住居跡に続いて調査が行われ、また翌年には環状列石の性格を把握する目的をもって、列石を構成する組石のなかから、15個所を選んで下部を調査した。しかし遺体の埋葬に適する土壌の発見は見られず、同時併行で調査が行われた列石外周域から、墳墓と想定される土壌が発見され、縄文時代晩期初頭の当該遺構は、列石の下部には遺体を埋葬する施設は造られず、外周域が利用されていたようである。

大森勝山遺跡の環状列石は、長径約49.0m、短径約39.0mを測り、平面の形状が不整の楕円形を呈している。この形状は、数個ないし数十個の石が集合されて一つの組石を造り、その組石が環状に配石されたものである。かつて当地は旧陸軍の演習場として、太平洋戦争後は近在農民の草刈り場に利用され、とくに後者の場合は、石が作業の障害となるため抜き取ったらしい。そのため抜き取り跡は見られたが立石は1本もなかった。

組石は全体で77発見され、その配置を見ると、攪乱される以前は二重の構造をもっていたように思われる。なお列石の形成時期は、内部から縄文時代晩期の大洞B・BC・C₂式土器が発見され、列石外は一時期前の十腰内Ⅰ群と、大洞B・BC・C₁式期の遺物が出土し、なかでもBC式土器が大半を占めている。したがって当環状列石は、縄文時代晩期前葉期の造営と解することができよう¹⁵⁾。

3. 在家平遺跡（P－261, 6）

遺跡は三戸郡の田子町から来満峠を経て、秋田県鹿角市の大湯に至る国道104号と、三戸町において馬淵川に合流する熊原川とに挟まれた水田のなかに所在し、地形的には熊原川の河岸段丘上に位置している。1962年（昭和37）6月8日に地権者が、畑地を水田化する目的で整地工事中に発見され、7月12・13の両日にかけて、工藤田子町郷土研究会長・関本田子町教育長の案内で、慶応大学の江坂輝彌と同大学生の高山純に村越も加わって調査を行った。

現場はすでに水田となって田植も行われており、環状を呈する列石の半分が辛うじて残されていた。残存部で見ると、径約25.0mを有した一重の列石であり、大森勝山などと同様に、20個内外の石を集合させて組石を構成している。なお組石の下部に土壌が存在するか、否かについては、未発掘のため不明である。列石の築造されている土層を見ると、大湯の環状列石と同じく、大湯浮石層下のようであり、出土遺物が少ない結果、造成の時期を明確に捉えることはできなかったが、恐らく大湯の列石と同時期

(縄文時代後期の十腰内Ⅰ群土器期)のものであろう¹⁶⁾。

4. 泉山遺跡

遺跡は岩手県に源を発する馬淵川右岸の低位河岸段丘上に立地する。1975年(昭和50)8月から10月にかけて、県道の拡幅工事に伴って緊急調査が行われ、竪穴住居跡をはじめ土壇・フラスコ状ピットなどの遺構とともに、環状列石も発見された。ただし調査は道路の拡幅の範囲のみであり、列石については完掘していない。列石は大森勝山や在家平と同様に、数個ないし数十個の石を単位とした組石が6組ほど弓状に並び、大半の組石は道路予定外の果樹園内にある。この組石の下層から縄文中期の土壇墓・フラスコ状ピットが発見され、内部から円筒上層e式土器や石器をはじめ、海獣骨(アシカ)・小動物の骨片などが出土している。人骨は発見されていない。当列石の造成時期は、出土遺物から考えて縄文時代晩期前半期(大洞B～C₁式土器期)と考えられる¹⁷⁾。

環状列石に関する所感(まとめに代えて)

環状列石については、東京大学の駒井和愛による北海道の当該遺跡調査を背景にした墳墓説と、祭祀または墳墓のいずれであるかの決定を保留した考えが、昭和二十年代の主流であり、その後、次第に墳墓説が大勢を占めるようになった。それを裏付ける証拠として、秋田県大湯の配石遺構内から発見された甕棺型土器や、土壇より高等動物の脂肪酸検出などがあり、それに類似するような形で、小牧野遺跡でも列石の一部から同型土器が発見されており、墳墓説を強く意識せざるを得ない状況となった。このように環状列石を墳墓であるとする見解に立つと、これらの墳墓は集落共同体における共同墓地と言うことになるであろう。

共同墓地の形成は、集落構成員の共同作業によって造成されたと考えられ、各組石が並べられて円を形作るには、集落構成員の信頼と衆望を担った指導者の存在を考慮に入れる必要がある。したがって指導者の指揮のもとに、人々の一致協力がこのような大事業を成し遂げたと私考している。また当然のことながら、この事業は当初から計画的に実施され、人々は大事業の趣旨を十分に理解し、その指揮にしたがったであろう。完成に至るまで集落の規模が大きいとすれば数年、その逆の場合は数十年を要した可能性も考えられる。

大森勝山では、遺跡の占地する台地の南北を東へ流れる大石川と、大森川の両小河川内に点在の石や礫を用いて77の組石を円形に並べ、小牧野では台地の東側を、八甲田山麓から北流する荒川の石を利用して、約60.0mの比高差をもつ台地上まで運び上げて列石を造成した。大森勝山においても小牧野でも、数人の力では運搬はもとより、動かすことの不可能な大きな石もあり、多数の人々の一致した協力を得なければならなかったであろう。小牧野遺跡よりも古い縄文時代前・中期の三内丸山遺跡では、住居跡群・遺物等の廃棄場・墓地などの各種施設が秩序をもって設定されており、集落の構成は計画的に行われていたと考えられ、また狭い範囲のなかに多数の住居跡が重複し密集している状況を見ると、定められた区域を離れての生活は許されず、一定の区域内で人々は互いに助け合いながら生活をなしていた、言わば相互扶助の社会を成立させていたと思われ、さらに住居跡の重複状態を捉えると、改築・新築等が数世代にわたり、幾度も行われていたことの証明にもなり、食料を求めた移動・流浪の生活を維持していたとは考えられず、定住生活をすでに実施しており、三内丸山に後続する小牧野の場合も、当然ながら定住生活を行いつつ、環状列石の造成に励んでいたものと考えられる。

最後に、本稿は環状列石の成立、および葬制に関する問題については、非才のため踏み込んでいない。

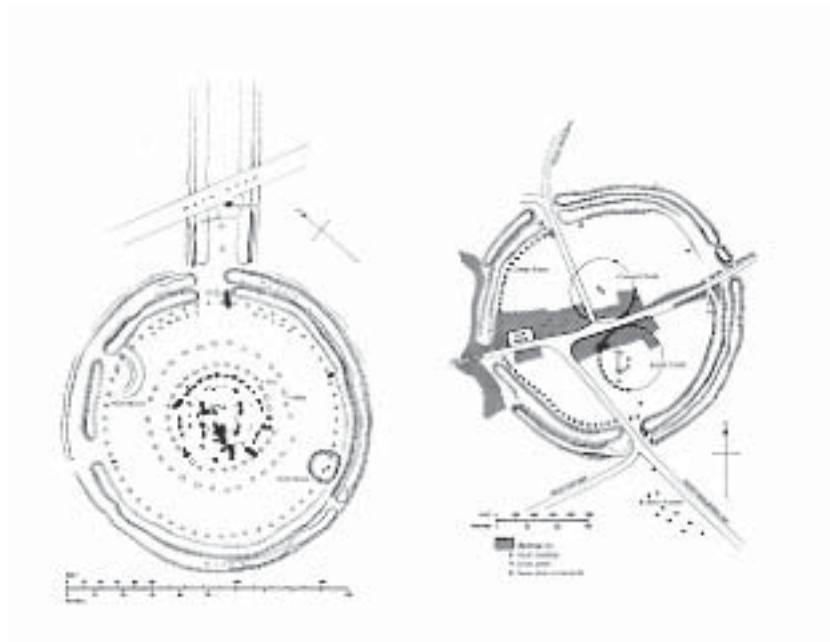
この問題には、大塚和義¹⁸⁾・林謙作¹⁹⁾・春成秀爾²⁰⁾・藤本強²¹⁾・阿部義平²²⁾・高橋龍三郎²³⁾をはじめ、多くの諸氏が論述されている。御検討いただくことを希望したい。

注および引用・参考文献

- 1) 青森県教育委員会 『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 79 1984年。
- 2) 大場磐雄ほか 『上原』(復刻版) 長野県教育委員会・長野県文化財保護協会 1976年。
- 3) 江坂輝彌・草間俊一ほか 『北上市稲瀬町樺山遺跡調査概報―第3次―』 北上市教育委員会 1968年。
- 4) 齋藤忠ほか 『大湯町環状列石』 文化財保護委員会 1953年。
- 5) 奥山潤ほか 『小坂町環状列石墳墓』 小坂環状列石調査団・小坂町教育委員会 1969年。
- 6) 4) に前掲 P.158。
- 7) 4) に前掲 P.190。
- 8) 2) に前掲。
- 9) 齋藤忠 「大湯環状列石と日本の縄文時代の類似遺跡について」『北奥古代文化』 3 1971年。
- 10) 齋藤忠 「配石遺構―特に環状列石について―」『考古学ジャーナル』 254 1985年。
- 11) 中野益男・中岡利泰 「配石遺構の土壌および甕棺土器に残存する脂肪の分析」『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』 秋田県鹿角市教育委員会 1986年。
- 12) 青森短期大学助教授 葛西勵君のご教示による。
- 13) 清水潤三 「青森県下北郡尻屋遺跡」『日本考古学年報』 7 1958年。
- 14) 八幡一郎編 『世界考古学大系―1 日本』 平凡社 1959年。
- 15) 田村誠一・磯崎正彦ほか 「大森勝山遺跡」『岩木山』 弘前市教育委員会 1968年。
村越潔 「大森勝山遺跡の環状列石」『北奥古代文化』 3 1971年。
- 16) 江坂輝彌 「青森県三戸郡在家平の環状列石」『日本考古学年報』 15 1967年。
小井田幸哉編 『田子町誌―上巻―』 P. 196～202 田子町 1983年。
- 17) 青森県教育委員会 『泉山遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 31 1976年。
- 18) 大塚和義 「縄文時代の葬制」『史苑』 27―3 (抜刷)
- 19) 林謙作 「縄文期の葬制」『考古学雑誌』 62―4 1977年。 63―3 1977年。
- 20) 春成秀爾 「縄文合葬論」『信濃』 32―4 1980年。
- 21) 藤本強 「総論」『縄文文化の研究』 9 雄山閣出版 1983年。
- 22) 阿部義平 「配石墓の成立」『考古学雑誌』 54―1 1968年。
〃 「配石」『縄文文化の研究』 9 雄山閣出版 1983年。
- 23) 高橋龍三郎 「縄文時代の葬制」『原始・古代日本の墓制』 同成社 1991年。

東北北部のおもな配石遺構（環状列石および特殊な配石）

遺 跡 名	時 期	所 在 地
青 森 県		
尻 屋 札 地	後 期	下北郡東通村大字尻屋字札地
大 森 勝 山	晩 期	弘前市大字大森字勝山
在 家 平	後 期	三戸郡田子町大字関字在家平
泉 山	晩 期	三戸郡三戸町大字泉山字田ノ上
小 牧 野	後 期	青森市大字野沢字小牧野
太 師 森	？	南津軽郡平賀町大字新屋字遠手沢
玉 清 水	晩 期	青森市大字平新田字玉清水
勝山ヤブシ長根	後 期	西津軽郡森田村大字大館字勝山
酪 農 5 号	後 期	むつ市大字田名部字内田
大 石 平	後 期	上北郡六ヶ所村大字尾駁字野附
岩 手 県		
湯 舟 沢	後 期	岩手郡滝沢村大字滝沢第10地割字湯舟沢
釜 石	晩 期	岩手郡松尾村大字寄木字畑第2地割
葺 内	後 期	盛岡市大字繫字上野
館 石 野	後 期	下閉伊郡田野畑村大字浜岩泉字館石野
（仮称）内 沢	？	和賀郡沢内村大字大野字内沢第17地割
樺 山	中 期	北上市稲瀬町大字大谷地
田 屋	後 期	稗貫郡石鳥谷町大字大瀬川
立 石	後 期	稗貫郡大迫町大字内川目字立石
観 音 堂	中期・後期	稗貫郡大迫町大字大迫第11～12地割字観音堂
宮 沢 原	中期・後期	胆沢郡胆沢町大字宮沢原
門 前 貝 塚	後 期	陸前高田市大字小友町字門前
御 所 野	中期・後期	二戸郡一戸町大字岩館字御所野
荒 谷	中期・後期	二戸市大字米沢字荒谷
堀 野	後 期	二戸市大字福岡字堀野
下 村 B	中期・後期	二戸市大字米沢字下村
秋 田 県		
大 湯	後 期	鹿角市大字大湯字野中堂・万座
玉 内	晩 期	鹿角市大字八幡平字玉内
高 屋 館 跡	後 期	鹿角市大字花輪
天 戸 森	中 期	鹿角市大字花輪字陣場
杉 沢	後 期	鹿角郡小坂町大字小坂鉾山字杉沢
石 倉 岳	後 期	北秋田郡鷹巣町大字七日市字石倉岳
伊 勢 堂 岱	後 期	北秋田郡鷹巣町大字脇神字小ヶ田
袖 野	後 期	仙北郡西木村大字西明寺字袖野
雲 穰 野	後 期	仙北郡仙畑村大字千屋黒沢字雲穰野
黒 倉	中 期	仙北郡田沢湖町大字卒田字黒倉



1. Stone henge (左) と Avebury の Stone Circle
(STONEHENGE AND AVEBURY
Her Majesty's Stationery Office, 1959 より転載)



2. Stone henge



3. Avebury の Stone Circle



4. 大森勝山遺跡の環状列石



5. 大森勝山遺跡の環状列石を空から
(弘前市教育委員会提供)



6. 在家平遺跡の環状列石 (一部)



7. 湯舟沢遺跡の環状列石



8. 湯舟沢遺跡 環状列石内の組石石棺墓